

## ディケンズはキャサリンと和解できたか？

## Was Dickens Reconciled with Catherine?

寺内 孝

Takashi TERAUCHI

## 別居

ディケンズは1857年1月6日、自分の素人劇団でウィルキー・コリンズ作『氷原』(*The Frozen Deep*; 1856)を、タヴィストック・ハウス (Tavistock House) の子ども勉強部屋を小劇場に作り変えて初演する。以後、8月24日までに、劇場は一定したわけではないが、11回演じ、うち1回はヴィクトリア女王夫妻の前、最後の3回はマンチェスターの大舞台である。最後の舞台では、大声量を要したために素人劇団の3女性に代えてプロの3女優、ミセス・ターナン (Mrs. Thomas Lawless Ternan)、次女マライア (Maria Susannah Ternan)、三女エレン (Ellen Lawless Ternan)を採用する。これを機に、45歳のディケンズは、次女ケイト (Katherine Macready Dickens; Kate, Katy, Katey, etc.) と同年齢、18歳のエレンの虜となる。

夫婦間の対立は早くも9月3日頃に現れ、10月11日、ディケンズは、寝室隣の自分の化粧室を寝室に転用し、ドアの凹所に柵板などを当てて封鎖する (*Letters* 8: 465)。

夫婦仲がそのようなように険悪であったとき、ディケンズがエレンのために注文したブレズレットがタヴィストック・ハウスに誤配され、妻キャサリン (Mrs. Charles Dickens, née Catherine Thompson Hogarth; ホガース夫妻長女) が受け取ったと言われる。さらに、そのような時、ディケンズが彼女に、エレンに会いに行くように告げ、次女ケイトが「行かせないわ!」と抵抗したが、彼女は行っている (Storey 96)。ケイトは一貫して母の同情者だ。

58年5月、ディケンズはキャサリンに別居条件を提示し、彼女が別居を受け入れ、弁護士を通じて交渉に入る。だが、キャサリンの母ミセス・ホガース (Mrs.

Hogarth) と四女ヘレン (Helen Isabella Hogarth) が、ディケンズとエレン・ターナンとの関係を外部に漏らさせたようだ。風聞・醜聞が飛びかい、その中にディケンズとジョージナ・ホガース (Georgina Hogarth; ホガース夫妻三女) の関係も含まれるようになる。

5月21日頃、キャサリンは年給600ポンドを含む別居条件を了承し、21歳の長男チャールズ (Charles Culliford Boz Dickens) を伴い、リーゼンツ・パークのグロスター・クレセント (70 Gloucester Crescent, Regent's Park) へ引っ越し、終の棲家とする。ケイトいわく、「母が家を出て行ったとき父は狂人のようでした」(Storey 94)。22年間、苦楽を共にし、かれの子を10人も生んだ妻との別居は軽々しい行為ではなかったのだ。不徳の多くがディケンズにあればあるほどに。

5月25日、ディケンズはアーサー・スミス (Arthur Smith) に「スキャンダルを訂正するための」私信を送り、「(ディケンズを) 公平に扱いたいと考える人」に見せる許可を与える。その中で、「ある若い淑女」について、ディケンズは「誓って言うが、あの若い淑女ほど徳性高く、汚れない人は決していない」と。この「淑女」こそ、かれが終生隠し通すことになるエレン・ターナン。ディケンズは世間を欺いた。

6月4日、キャサリンは別居証書にサインする。だがディケンズのそれは6月10日 (Letters 8: 578 and n.)。彼女の翻意を期待していた可能性は皆無とはいえない。このサインでかれは完全に後戻りできなくなる。

事態はまだ収束しない。ディケンズが醜聞を打ち消す意図で、「個人にかかわって」('Personal') を書き、6月7日付『ザ・タイムズ』(The Times) 紙と、彼の週刊雑誌『通り言葉』(Household Words) に載せ、他の諸機関にも掲載を依頼する。だが、『パンチ』(Punch) 誌の編集者マーク・レモン (Mark Lemon) は断わり、フレデリック・エヴァンズ (Frederick Evans) がそれを支持する。この2人はキャサリンの共同被信託人を務めていたからだ。これを機にディケンズはこれら2人の親友と絶交し、『通り言葉』—ブラッドベリとエヴァンズが共同経営する 'Messrs Bradbury and Evans' 刊—を廃刊に追いこみ、代替誌『一年中』(All the Year Round; Messrs. Chapman & Hall) を興す (Forster 2: 226)。

問題はなお尾を引く。先に、ディケンズがアーサー・スミスに託した私信が『ニューヨーク・トリビューン』(New York Tribune) 紙のロンドン特派員にスクープ (8月16日付) され、ディケンズは酷評される。以後ディケンズはこの私信を「侵害書簡」('Violated Letter') と呼ぶ。

この頃、キャサリンはディケンズの激怒を買うようなことをミス・バデット・クーツ (Miss Burdett-Coutts) に打ち明けたようだ。ディケンズは8月23日、「彼

女はほくに言葉で言いあわせない心の苦悩をひきおこした。・・・彼女とはもう話し合いたくない。彼女を許し、忘れたい」(*Letters* 8: 632-34)。

### 公開朗読

ディケンズは53年来、いくらかの慈善朗読を行っていたが、夫婦喧嘩中にも3回実施する。この時期、キャサリンとの相克で「いつきの安らぎも充足もない」状態だったから(*Letters* 8: 535-36)、肉体を駆使し、大喝采と慈善のための収益が得られる朗読は、格好のストレス解消策となった。

だが、58年4月29日、ディケンズはこの「慈善」を、ジョン・フォースター(John Forster)が反対し続けた「有料」に切り替える。別居交渉中のキャサリンと、愛人エレンへの算段があったからだろう。11月13日までに100回挙行し、大収益を上げ、さらに58年末からも開催し、63年春までに101回行う。

### エレン・ターナン(1)

58年10月、ディケンズはミス・ターナンの長女フランシス(ファニー)(Frances Eleanor Ternan; Fanny)を母親同伴でイタリアへ音楽留学させる。ディケンズが彼女のために紹介状を書き、費用も負担したと見られている。他方、2女マライアと3女エレンは、ディケンズが手配したと思われる新住所(No. 31 Berners Street, Oxford Street)へ移転する(*Letters* 8: 687 and n)。

59年3月、長女ファニーと次女マライアはリーゼンツ・パーク近くの壮麗な4階建てテラス・ハウス(2 Houghton Place, Amptill Square, N.W.)の84年間の借家権を購入する。時価1,000ポンドから1,500ポンドとされ、これもディケンズの負担と見られている。そして5月23日以後、クーツ銀行(Coutts & Co.)のディケンズ口座から1回につき3ポンドから100ポンドの間でホートン・プレースないしエレンへ不定期に支出される。ちなみに、エレン関係の年間の支出をいえば、年度によって開きがあるが、例えば、1859-60年318ポンド、1867年500ポンド(*Letters* 9: xii and 11n)。そしてディケンズはその屋敷へ毎週2、3回出入りする(Wright, *Life* 280-83)。

60年3月、エレンが21歳の誕生日に、2人の姉から上記テラス・ハウスの賃貸契約書を譲渡される。こうしてターナン家は46年に一家の支柱トマス・ターナン(Thomas)を亡くして以来窮乏状態にあったが、ディケンズとの交際で急速に好転する(Schlicke 558)。

## 恐怖の2作品

ディケンズのスキャンダルは58年8月末頃ほぼ終息。59年2月1日、ディケンズは、ジョージ・エリオット（George Eliot, Marian or Mary Anne Evans）から彼女の長編小説『アダム・ビード』（*Adam Bede*）を贈呈される。ディケンズが礼状を出すのは7月10日。その中で『アダム・ビード』は僕の生活の実体験と忍耐の中にその位置を占めました。・・・ヘティ（Hetty）の性格の概念があまりに巧妙かつ真実なので僕はその本を何度となく置き、目を閉じ、それについて考えました。・・・そしてヘティの裁きに続くあの部分は・・・他の何よりも僕をはるかに多く感動させ、作者に対する僕の共感を最高にまで高めてくれました。ヘティとはバター作りの娘で、地主の跡取り息子アーサー・ドニソーン（Arthur Donnithorne）に誘惑され、子を生子、死なせてしまい、絞首刑の裁きをうける女性だ。

ディケンズはこの本を読みながら「目を閉じ」たとき、自分をアーサー・ドニソーンに、ヘティをエレン・ターナンに重ね合わせ、自分の犯した「決して取り返しのつかないような間違い」（Eliot 584）に戦慄したに違いない。ディケンズはこの小説で自責の念を深め、エレンに対し、いかなる不誠実も許されないことを銘記せざるを得なくなっただろう。『アダム・ビード』は恐怖の小説となったはずだ。

ジョージ・エリオットはディケンズの礼状を受けとり、「ディケンズの人生における新時代が、『アダム・ビード』を読むことで開けた」と見なす（*Letters* 9: 93n）。エリオットはディケンズのプライバシーを知っていたかもしれない。彼女の、54年以來の公然の同棲者で作家ジョージ・リューイス（George Lewes）は、ディケンズの素人劇団員という身近な関係にあったからだ。

63年1月31日、ディケンズはパリで、ゲーテ（Goethe）の劇詩『ファウスト』（*Faust*）に題材をとった、シャルル・グノーウ（Charles Gounod）のオペラ『ファウスト』（1859）を観劇する。劇中、マーガリート（Marguerite）という若い女性が、ファウストの置いた宝石類を拾い、身につけ、その後にはファウストの誘惑に負け、子を生子、捨てられ、子を殺し、捕らえられ、処刑される。

ディケンズはマーガリートが宝石を拾う場面で嗚咽したと見られている。かれがかつてエレンに送ったプレスレットを、キャサリンが受け取る場面を連想させるのに十分だったからだ（*Letters* 10: 215n）。翌2月1日付書簡で、かれは「その楽曲にほとんど耐えられなかった。・・・僕自身の心の中に存在する物事の、悲しい反響のように耳の中で響いた」と（*Letters* 10: 205-06）。19日付書簡でも、「耐えられなかったよ。完全に負けた」（*Letters* 10: 215）。『ファウスト』は恐怖

のため押しとなったに違いない。

## 60年の2通の書簡

60年4月、ディケンズがミス・クーツ宛に書いた、2通の看過できない書簡がある。両方とも、キャサリンにかかわるもので、5日付では、「この2年間、ぼくは一再ならず深手を負わされてきたので傷口をつきとめることができません。・・・あの姿は永久にぼくの生命の届かないところにあります・・・ぼくの願いは、二度とそれ（あの姿）を見ないことです」。8日付では、「ぼくは自分自身が無罪とは思っていませんが、あらゆる他のことにおけると同様、このことで、ぼくは毎日ますます多く、すべての愛と慈悲の中で最高のものをどれほど多く必要としているかを知っています」。一方で、キャサリンに強い不快感を示しながらも、他方で罪を明確に認識している。

## ディケンズの敗北

ディケンズは『ハード・タイムズ』(*Hard Times*; 1854)でグラッドグラインドの教育を「種まき」(Sowing)、「刈り取り」(Reaping)、「倉入れ」(Garnering)の3部に分けて揶揄・批判した。当時、かれの長男チャールズはまだ17歳。だが、5年後の59年以後、彼自身が「種まき」の結果を問われることになる。結論から言えば、キャサリンの在宅時、ディケンズは出世街道を駆けのぼり、すでに天才作家の異名をとるが、キャサリン別居後、子どもたちの自立期に直面し、無残な「刈り取り」を強いられる。それまでの時代をディケンズの「勝利の時代」とすれば、以後は私的な面で「敗北の時代」である。本稿では、次女ケイトと長男チャールズのみを取り上げる。

次女ケイトは持ち前の激しい気性から、ディケンズが「マッチ箱」(Lucifer Box)と渾名した娘だ。その彼女が最も多感な時期に、父母は大喧嘩、そして別居。ケイトはそんな「惨めさと不幸」を嫌い(Storey 94)、59年10月までに、ウィリキー・コリンズの弟で、病弱な画家兼作家チャールズ・コリンズ(Charles Collins)との結婚を言い出し、一家がギャズ・ヒル邸へ引っ越した直後の60年7月、父の反対を押し切って結婚する(Storey 105)。

祝宴が終わり、新郎新婦らが去ったあと、長女メアリーがケイトの寝室へ行って驚く。父がひざまずいた格好でケイト(ケイティ)のウェディングドレスに顔をうめ、「ぼくがいなかったら、ケイティは家を出ていなかっただろう」と泣いたからだ(Storey 105-06)。人間の内的醜悪さ — それはディケンズが

告発してやまなかった対象だが、その悪が自身に内在することを実感させられることになったのだ。

ケイトの結婚に先立つ60年6月、ディケンズはロンドンのタヴィストック・ハウスを売りに出し、ロチェスターのギャッツ・ヒル邸へ引っ越す。7月にケイトの結婚式を終え、9月3日、ディケンズはケイトと2人の息子に手伝わせて「20年間溜めてきた書簡と書類」をギャッツ・ヒルの野で焼却する。ディケンズは過去と決別し、再生を誓ったのだろう。その過去とは、キャサリンと結婚した日から今日までの24年間でもある。イエスは説く、「だれも、2人の主人に仕えることはできない」(Matt. 6: 24; Luke 16: 13)。イエスに従わなければ、かれはアーサー・ドニソーンになるかもしれないし、キャサリンをも潰してしまう可能性がないとは言えない。恐怖の『アダム・ビード』に加え、最愛の娘ケイトの離反行為がディケンズの内心を激しく揺さぶったと見るべきであろう。

ディケンズの長男チャールズは58年5月末から約2年間、母と同居したあと、60年5月、茶商人として身を立てるべく、茶の仕入れで香港へ旅立つ。帰国は61年1月、そして10月にロンドンで起業し、11月結婚する。相手は選りによってベシー・エヴァンズ (Elizabeth Matilda Moule Evans; Betsy or Bessie)。この娘こそ、ディケンズが絶交中のフレデリック・エヴァンズの娘だ。エヴァンズは娘の結婚に猛反対、ディケンズも反対で、結局、ディケンズは式に出ない。だが、キャサリンは当然出ただろう。

## エレン・ターナン (2)

ケイトはグラディス・ストーリー著『ディケンズと娘』(*Dickens and Daughter*; 1939)で、父とエレンとの間に男児が生まれ、早世したと語っている。

クレア・トマリン(Claire Tomalin)によれば、エレンは62年から65年までの間、パリかブローニュ (Boulogne) 近傍に隠棲したが、その間に彼女がディケンズの子どもを生んだとすれば62年か63年で、場所はパリ、その子は63年夏に死亡したと見る (Tomalin 135-49; *Letters* 10: xii, 191 and n)。トマリンの推理を裏付けるかのように、62年中頃以後、ディケンズはロンドン-パリ間を頻繁に往還すると共に、62年9月から63年3月頃までの書簡の内、少なくとも6通で、かれはエレンにかかわる苦悩をにじませる (*Letters* 10: 129, 134, 191, 196, 198 and 225)。

折しも63年6月9日、ミセス・ターナンの次女マライアがロンドンで結婚式を挙げるが、ミセス・ターナンとエレン母子は列席していない (*Letters* 10:

xii; Tomalin 152). よほどの理由があったと見るべきであろう。加えて、ディケンズは60年から64年までの間、フランスに隠れ家を持っていたことが知られている (*Dickensian* 67 (Spring 1966): 69–86)。

エレンが英国に再び姿を現すのは65年6月、ステイプルハースト (Staplehurst) の汽車脱線転覆という衝撃的な事件においてである。

10月、ターナン家はテラス・ハウスを他人に賃貸し、年間50ポンドから60ポンドの収入を得るかたわら、直近のリドリントン・プレース (Lidlington Place, Harrington Sq.) へ転居する (*Letters* 11: 122n)。

66年1月、ディケンズはロンドン西方、スラウのハイ・ストリートに2軒のコテージを借り、一軒は自分が、他の一軒、エリザベス・コテージ (Elizabeth Cottage, High St, Slough, Buckinghamshire) にはエレンとミセス・ターナン母子を住ませる (*Letters* 11: xiii and 229n; Tomalin 171)。

66年4月、長姉ファニーが、フローレンス在住のディケンズの友人で、アントニー・トロロプの兄トマス・トロロプ (Thomas Adolphus Trollope) に招かれ、亡妻の遺児、13歳のビアトリス (Beatrice) の住み込み家庭教師となり、同年10月、二人はパリのイギリス大使館で結婚式を挙げる (Tomalin 156–59 and 162–63)。

67年6月、エレンはエリザベス・コテージよりもはるかに大きくて住みよいペカムのウィンザー・ロッジ (Windsor Lodge, Linden Grove, Nunhead, Peckham, Surrey) へ引っ越し、ディケンズ死の時まで住み続ける (Wright, *Olney* 239–41; Tomalin 200)。

### エレン・ターナン—2 通の書簡

ディケンズは67年6月6日付ウィルズ宛書簡で、「例の受難者 (エレン・ターナン)、ぼくは大難事と認める。しかし、難事に直面して屈服するのが好まないのを君は知っている。もしそれが打ち負かされることができればね」 (*Letters* 11: 377)。これの詳細は定かでないが、最低限いえることは、この文面が、円満な夫婦の間で語られる質のものでないことは確かだ。

もう1つの書簡は7月4日付フラーンシス・エリオット夫人 (Mrs. Frances Elliot) 宛で、この中でディケンズは、トマス・トロロプ夫人、つまりファニーのことを「ぜんぜん好きじゃない」と記すと共に、トロロプ夫妻がディケンズとエレンとの関係に反対しているのではないか、あるいはディケンズのアメリカタワーにエレンが同行することに反対しているのではないかという恐れを暗示する (*Letters* 11: xiii, 260n and 389–90n)。

上記2通の書簡から、ディケンズとエレンとの間に、当然の帰結ともいえるべきいくらかの乖離が生じているのを感じ取ってよいだろう。実際、エレンにしてみれば、18歳のとき「しぶしぶ」ディケンズの愛人になったのであり（Wright *Life* 280）、以来10年が経過し、その間に5回の、それも、いくつもの偽名を行使した上での転居、隠棲である。彼女はもう28歳。だが妻ではないし、子どもを生める関係でもない。「はたして自分は何なのか」という疑問が彼女や彼女の周辺で起こらなかったと言えるだろうか。ジョージ・リュイスとジョージ・エリオットの公然の関係を知れば知るほどに。

エレンが「自分を責め、日々かれ（ディケンズ）からますます遠ざかろうとしていた」（Wright, *Life* 281）のは現実だろう。のちに、と言ってもディケンズ死後のことだが、彼女はベナム神父（Canon Benham）にディケンズとの関係を告解し、「人目を避けるという、まさにその考えを嫌悪した」と（Wright, *Olney* 67; *Life* 356）。

### 病身と朗読再開

フォースターは「1865年2月」をディケンズ健康上で重要な年といい、「あの恐ろしい足の病気が発生した」と書いている（Forster 2: 293 and 249）。当時、この病気を「痛風」と診断するのは容易でなかったようだが、トンプソン（Henry Thompson）医師が診断し（*Letters* 12: 296, n, 299 and 301）、フォースターが察知したように（Forster 2: 249）、今日、かれの病気を「通風」——ディケンズは終生それを受け入れなかったが（*Letters* 12: xvii and 341; Forster 2: 260）——と見るのが一般的だ（Bowen 141 and 143–46）。

ディケンズはその病に加え、心臓に異常を感じるなか、66年4月、約3年ぶりに朗読を再開し、6月中旬までに30回、67年1月中旬から5月中旬までに、「痔」の多量出血にも悩みながら、52回それぞれ完遂する。しかし、なお「支出があまりに莫大」（*Letters* 11: 366）だったのでアメリカ・ツアーに踏み切る。

### エレン・ターナン（3）

ディケンズはアメリカ・ツアー中（67年11月9日～68年5月1日）、疲労、悪性の風邪、不眠、食欲不振、慢性的な足の腫れ・痛みに悩まされるが、それでも、全83回を消化し、純益1万9,000ポンドを上げる。かれがリバプールに帰港するのは5月1日で、翌2日、ペカムのウィンザー・ロッジへ赴き、エレン・ターナン—4月に、母親とフローレンスを発ち、ディケンズ帰国の数日



前、ウィンザー・ロッジに戻る (Tomalin 182-83) —と 5 月 8 日まで過ごしたと見られる (*Letters* 12: 101n). ディケンズのギャズ・ヒル帰宅は 5 月 9 日、そしてこの日、かれはミス・トマス (Miss Thomas) (エレン・ターナンの変名) に 125 ポンド支出し、以後、死のときまで、毎月 1, 3 回の割合で 7 ポンド余から 350 ポンドの間で支出し、家計費と見られる。例えば、68 年 6 月～69 年 6 月、690 ポンド、69 年 6 月～70 年 6 月、332 ポンド余 (*Letters* 12: 162n).

### 死に向かっているディケンズ—お別れ朗読会

お別れ朗読会は渡米前、チャペル (Messrs. Chappell) 社との間で交渉が始まっていたが、妥結するのは滞米中の 68 年 3 月頃、郵便を通じて、100 回 8,000 ポンド。

この頃 (3 月?), ディケンズの腹心で、『一年中』の副編集者ウィリアム・ウィルズ (William Henry Wills) が落馬事故で頭部を強打し、数ヶ月間絶対安静となる (*Letters* 12: xxiii and 89). そのために、ディケンズは帰国後、『一年中』の職務全般を引き受けざるを得なくなる (*Letters* 12: 111 and 130; Dolby 336). 不運は重なるもので、7 月ごろ長男チャールズが事業に失敗・破産し、翌 69 年 3 月、ディケンズはかれの負債 1 3 9 ポンド余を弁済する。

68 年 10 月 6 日、病身の中でお別れ朗読会が始まるが、5 日後、「夜ごとの激しい活動のあと、ごく簡単に吐き気をもよおす」(*Letters* 12: 197). 25 日リバプールにいたとき、フォースター宛書簡で「ぼくの体調はずっとよくない、ひどく疲れたままだ。しかし、ぼくは不平を言うことはほとんどない—何もない、何もない；メアリアナ (Mariana) のように疲れているけれども」と記し、このシリーズが終われば、「1 年半 (アメリカ・ツアーを含めて) で 2 万 8,000 ポンド」稼ぐことになる、と結ぶ。

「メアリアナ」とはテニソン (Alfred Tennyson) の短詩「メアリアナ」(‘Mariana’; 1830) で詠われた娘で、「『かれは来ない』と彼女は言った / 『わたしは疲れている、疲れている / 死ねばよいのに！』」と 6 回反復したあと、「『かれは来ないだろう』と彼女は言った / 彼女は泣いた『わたしは疲れている、疲れている、 / ああ神様、死ねばよいのに！』」と」で終わる。

ディケンズが「メアリアナ」を言うとき、かれは、エレンもまた「メアリアナ」であることを認識しただろう。かれが地方朗読に出向いている間、彼女は「かれは来ない」の「メアリアナ」だったのだ。そのようであっても、ディケンズは事態を改善できなかつたし、2 人の未来に明るい日々を展望できたわけでもない。ディケンズが「疲れている」といったとき、かれは生きることに一

定の限界を感じ始めたのかもしれない。エレンはもう 29 歳 (68 年 3 月)。ディケンズの罪悪感—エレンに対してのみならず、キャサリンや世間にも—は深まる一方だっただろう。かれはいつの頃からか、「生きて老いることを望まなかった」し (Storey 137–38), 「仕事中に死ぬ」ことを考えるようになっていた (*Letters* 8: 89; Forster 2: 197–98; Storey 137)。10 年前の 58 年 5 月 (キャサリンが家を出た 5 月), かれはすでに遺言書の「下書きのための覚え書き」を作り、清書を 61 年 10 月 2 日に終え (*Letters* 9: 464 and n), 死を望見するようになっている。「止まって苛立つよりも進んで苛立つ方がはるかにまし。休息なんて、ある人々にとってはこの世にない」(*Letters* 8: 89) —が、かれの行動様式だ。

朗読中の 69 年 2 月, ふたたび左足の激痛におそわれ, びっこを引く (Forster 2: 360; *Letters* 12: 290–91 and 293n)。4 月, 足の痛みと, 痔の出血があり (*Letters* 12: 332 and 334), 同 19 日, 71 回目の朗読のためにブラックバーン (Blackburn) へ移動し, ここでロンドンのピアード医師 (Francis Carr Beard) 宛に「ひどく目まい」がし, 「足元が非常におぼつかなく (特に左側), 両手を頭まで上げる気にはとてもならない」(*Letters* 12: 336 and 340–41)。22 日, プレストン (Preston) へ移動したとき, 同医師が駆けつけ, その日の午後 6 時 15 分の汽車でかれをロンドンへ連れ帰る (*Letters* 12: 340n)。他方, ディケンズは長女メアリー宛短信で, 「ぼくには無視してはならない兆候がある」(*Letters* 12: 342)。

4 月 25 日, ディケンズは遺言書の書き直しに着手し (*Letters* 12: 344), 5 月 12 日, エレンへの遺贈金 1,000 ポンド, キャサリンへの生涯年金 600 ポンドの原資とするための投資用資金 8,000 ポンドなどを記して完成する。

朗読会の中止から数週間後, ディケンズはワトソン医師 (Thomas Watson) に, 健康の十分な回復を装いながら, チャペル社への損失補てんという理由で, 朗読再開の許可を求める (Dolby 416 and 442–43)。危機的状況にあっても彼は立ち止まらなかったのだ。同医師は深い憂慮を示しながらも拒絶する立場にないとの考えから, 年明け (70 年) 後, ロンドンで 12 回, といった主旨の同意を与える (Forster 2: 363–64; Dolby 416 and 443)。同年末, 足の痛みが再燃し, クリスマスに歩行不能, ほほ終日, 寝たきり。

### ディケンズの回心

エドワード・ディケンズ (Edward Bulwer Lytton Dickens) は末子 7 男。ディケンズ最愛の息子で, かれが「プローン」(Plorn) と綽名した子だ。68 年 9 月, 16 歳のとき, 4 男アルフレッドの後を追ってオーストラリアへ移民する。

ディケンズは最後の別れをロンドン・パディングトン駅 (Paddington Station)

ですることになっている。汽車が着いてプローンが現れると、衆人を尻目に、なりふり構わず慟哭したのはディケンズである (H. Dickens, *Memories* 22–23; *Recollections* 36–37)。このときディケンズはプローン宛に書簡 (9月26日付?) を用意し、以下のように記す。

どんなことにおいても他人をいやしく欺くようなことは絶対にしてはならない。そしてお前の力の及ぶところにいる人に決してつらく当たってはいけない。お前が他人にしてもらいたいと思うように他人に対して行うように努めなさい。 (*Letters* 12: 187–88)

一体この言葉は誰に向けて言っているのだろうか。ディケンズがプローン宛に書いたことは間違いないが、この文面こそ、かれ自身の悔悟の言葉であろう。10年前、プローンが6歳のとき、世間をあざむき、キャサリンを含むホガース家の人たちにつらく当たり、プローンを「母なし子」にし、その後のキャサリンの歩み寄りにも応じられなくなっている。ディケンズの痛恨の思いが込められた一文と見てよいだろう。

書状はなおも続く。「まさにその理由のために、ぼくはお前の書物の中に新約聖書を入れた。・・・なぜならそれはこの世で、過去未来を問わず最良の書であるからだ。・・・朝夕に、おまえ自身の祈りをする健全な習慣を捨ててはならない。ぼく自身はそれを捨てたことがないし、その慰めを知っている」。

ディケンズはこれと同趣旨のことを、5男シドニー、3男フランク、4男アルフレッドとのそれぞれの別れの時 (順に、最初の遠征の61年か?、63年、65年) にも記している (*Letters* 12: 734)。ここから、ディケンズは遠い過去に回心していることが分かる。回心なくしてそのように書けないし、回心なくして祈りも聖書もあり得ないからだ。

70年6月9日午後6時過ぎ、ディケンズは脳卒中 (apoplexy) で死亡する。かれは遺言書でキャサリンのことを「私の妻」 (my wife) と記しているが、彼女と和解することなく逝っている。エレンを、イエスの教えに従ってキャサリンの位置にすえていたからだろう。遺言書でかれは、「われらの主にして救い主でありますイエス・キリスト様を通じてわたしの魂を神の慈悲にゆだねます」と。イエスの弟子となつての昇天である。精神的に和解できている、現実にできなかった無念さを残して。

付記 本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部 2006年春季大会 (6月20日、於山

口大学)で講演したものに加筆したものです。紙幅の都合で書き残した部分は別稿を  
考えています。

### 参考文献

- Adrian, Arthur A. *Georgina Hogarth and the Dickens Circle*. 1957. New York: Kraus, 1971
- Aylmer, Felix. *Dickens Incognito*. London: Hart-Davis, 1959
- Bowen, William Henry. *Charles Dickens and his Family*. Cambridge: Heffer, 1956
- Collins, Philip, ed. *Charles Dickens: The Public Readings*. Oxford: Clarendon Press, 1975
- Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. New York: Checkmark, 1998
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Oxford: Clarendon Press, 1982–  
2002
- . *The Letters of Charles Dickens*. CD-ROM edition. Charlottesville: InteleX, 1992
- Dolby, George. *Charles Dickens As I Knew Him*. New York: Haskell, 1885. 1970
- Eliot, George. *Adam Bede*. Harmondsworth: Penguin, 1985
- Fitzsimons, Raymund. *The Charles Dickens Show: An Account of his Public Reading 1858–  
1870*. London: Bles, 1970
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: Everyman's Library, 1969
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. London: Hamilton, 1952
- Matsuoka, Mitsuharu. Hyper-Concordance <[http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/  
dickens/](http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/)>
- Nisbet, Ada. *Dickens and Ellen Ternan*. Berkeley: University of California, 1952
- Page, Norman. *A Dickens Companion*. London: Macmillan, 1984
- . *A Dickens Chronology*. London: Macmillan, 1988
- Perugini, Kate. "Edwin Drood," and the Last Days of Charles Dickens.' *Pall Mall Magazine*  
37 (June 1906): 642–54
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford University Press,  
1999
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983
- Storey, Gladys. *Dickens and Daughter*. New York: Haskell, 1939. 1971
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman*. Harmondsworth: Penguin, 1991
- Warren, T. Herbert, ed. *Tennyson, Poems and Plays*. Oxford: Oxford University Press, 1983
- Wright, Thomas. *The Life of Charles Dickens*. London: Jenkins, 1935
- . *Thomas Wright of Olney*. London: Jenkins, 1936